

# 一番好きなものから食べるのだ



二〇二五年初のエッセイ。すでに六年の一年(早い!)が過ぎようとしておりますが、今年もどうぞお付き合いくださいませ。

歳をとると時間が経つのが早く感じるのは、「一年の相対的な長さが短くなるから」。ドラマ『ブラッシュアップライフ』の中でこんなセリフがありました。あの時、妙に納得したのです。四十八歳の一年と八歳の一年では体感時間が違います。来年、再来年、そして十年後はもっと一年を短く感じるのかもしれないよ。だから「一番好きなものから食べよう」と決意を新たにしました。「一番やりたいことからやる」「一番好きな服を着ていく」。もったいぶっている暇はないぞと思うのです。

私の昨年一年間は嵐でした。上半期は私と長男はタイに住み、夫と長女、次男が日本に住むという生活を送る中で、子供達の進学問題がありました。なぜ全員三学年差! タイととをやるべき。

それはそうなのですが、さて。彼女が辞めることになってから、「どうしよう」と頭がぐるぐるしてました。ぐるぐるしすぎて、自分は何を目指しているのかとか、考えることも抽象的に。何がしたいのか、何をしたら楽しいと思うのか。自分の気持ちに分からないって苦しい…。

分らない時は具体的に動いてみるしかないわけで、年明けに一人で催事に出店してみました。無事に成功。他の出店者さんと助け合えばなんとかなることが分かりました。

今月末は日本を離れ、はじめてタイでのイベントに出展してみることにしました。たった半日のイベントのために、十万円以上の旅費をかけるのはためらわれましたが、エイッと行ってくることにしました。なんとなく行った方がいい気がする、という直感ですが、二人で経営していた時は気が引けて行かない出張です。

日本を歩き来しながら受験と入学手続きと卒業式と入学式をやりくりしました。六月にはタイの家の退去や海外引越を一人でこなしました。

本帰国してからは、仕事が激動。私はとても小さいながらも六年前から店を経営しています。昨年夏には、うちにとっては大きな規模の展示会に初出展。その後、百貨店での催事出店も初めて経験しました。

そしてここからはお客様も知らない話なのですが、一緒にこれまで経営してきた事業パートナーが辞めてしまったのです。彼女にやってみたいことが他にできて、その道で就職するには年齢的にラストチャンスだろうと。私がタイにいる間にも店を続けることができたのは、彼女のおかげですし、そもそも、彼女に誘われなければ実店舗を持つというチャレンジはしなかったのですね、彼女には感謝でいっぱいです。彼女にとって動くのは早い方がいいし、一番やりたいこ

これまでの私は、事業パートナーにかなり気を遣っていたのだなと気づきました。一人ではできないと思ひ込んでいたことにも気づきました。

昨年末ぐるぐるしていただけの頭の中は、最近になって随分気楽になりました。なにか、場面が変わったような感じさえします。一人になるべくしてなったのかも。どうせ一人なのだから、迷った時はわくわくする方を選ぼうと思ひます。でも一番辛いのは、わくわくすることが何か感じられなくなる。一番好きなものから食べることは、自分の気持ちを素直に感じ取る毎日の練習のような気もしているのです。



文・写真 小宮華寿子  
二男一女の母で編集者。「ブラジルの手しごと」著。ジュエリーと世界の手仕事ワークショップの店「メルカジニョ」(https://mercadinho.net)代表。



イラスト・デザイン 寺沼麻美  
切り絵作家、時々デザイナー。「ゆらゆらゆるる北欧風手作りモビール」(ネコ・パブリッシング)を監修。